

①トップの覚悟

昨年7月、神戸・北野に法律事務所を開設しました。もともと警察官僚の道を歩んできましたが、「組織の外から幅広い視野で活動したい」と思って、退官したのが4年前です。警察時代に合格した司法試験の資格をいかして弁護士に転身しました。しばらくは東京の大手法律事務所で修業し、満を持して故郷に拠点を構えることにしました。主に担当するのは企業法務です。具体的には企業にコンプライアンス（法令順守）や危機管理、反社会的勢力への対応の問題をアドバイスして

後藤コンプライアンス法律事務所代表 後藤 啓二さん(49)



悪しき慣習との決別と危機管理

います。最近、食品の不正表示事件や耐震強度の偽装事件など企業の違法行為が目立ちます。不祥事は経営に打撃を与え、企業に存続を許さないこともあります。

一昔前までは企業が総会屋に利益供与し、金融機関が地上げに暴力団を使うことも珍しくなく、それでも社会から退場を迫られることはありません

ことう・けいじ 昭和34年、神戸市生まれ。49歳。東京大学卒業後、57年警察庁。警察庁企画官や大阪府警生活安全部長はじめ、内閣官房副長官補（安全保障・危機管理担当）付参事官などを歴任して平成17年に退官。企業法務のほか、犯罪被害者支援や子供の安全、児童買春・児童ポルノ問題などについて法制度の改善を求める活動にもライフワークとして取り組む。

ませんでした。いま、企業そのものはクリーンになっていますが、なお企業不祥事が相次ぐのは昔なら大目に見られていたことが、社会の変化で通用しなくなったことに気づかず、変えられなかったケースです。談合や産地偽装が典型ですが、ほとんどが内部告発で発覚しています。

企業にとって社会の目が厳しくなり、法規制も強化されています。違法行為のあった企業の商品は売れなくなり、資金調達も困難になります。かつては守ってくれた監督官庁も厳しい対応を迫ってきた

す。最近是不祥事で企業が倒産することもあるようになりまし。つまり法令順守と危機管理を進めることが企業価値を増大させ、社員を守ることにつながるのです。

企業は不祥事のほかに製品事故、情報流出、反社会的勢力の接近などのリスクを抱えています。このような危機管理で重要なことは、悪い情報ほど迅速にトップに集まる制度や風土にすることです。隠蔽はもつてのほか。嘘はつかない。公になることでの損失は覚悟する。トップは平素から責任を持って対応することを心に決めておかねばなりません。いざというとき魔がさすことのないように。

（聞き手 松岡達郎）

②少年、青年期

昭和34年、神戸市で生まれました。父は会社員で、毎日午後6時くらいには仕事から帰宅して家族みんなで夕食です。プロ野球の阪神タイガースのファンで、よく甲子園球場に連れていってもらいました。父とは1つ年上の兄といっしょにキャッチボールをした思い出が残っています。そうした家庭環境だったので小学校時代は、少年野球チームに入っていました。当時、テレビでアニメ「巨人の星」がブームだったこともあり、幼心に「阪神の星」を目指していました。でも、なぜか

後藤コンプライアンス法律事務所代表 後藤 啓二さん(49)

打席では空振りばかり。コーチから教えてもらってもバットに当たらなかったですね。灘中・高等学校に進学後も野球部に所属しました。部員は少なかったのですが補欠でした。しかも「36対0」で負けたなんてこともありました。現実を知るにつれてプロ野球選手の夢は急速にしぼみ、野球部は高1でやめてしまいました。小学校時代を含め6年間も野球に打ち込んだので、何かほかに熱中できる対象が欲しくなり、高2で生徒会長に立候補しました。灘では高3は

治安守る仕事にひかれ警察へ



「阪神の星」を目指す野球少年だった後藤啓二さん(右)。左は兄の浩一さん

大学受験を控えているので通常、生徒会長は2年生が務めるのです。そこに立候補してきたのが、当時1年で現在コラムニストとして幅広く活躍する勝谷誠彦氏です。結果は勝谷氏が高1にして生徒会長の座を射止めた。対抗馬が下級生だったので落選は計算外でした。ショックでしたが、大学受験を前に野球や勉強以外のことをしてみたかったので、立候補できただけでもいい経験になりました。当時から漠然と「官僚になりたい」と思っていたので、

東大法学部に進学しました。ただ、学生時代はどちらかというと、法律よりも歴史や地理などに興味があり、テニスやマージャンに時間を費やすことも少なくありませんでした。

大学3年生から勉強に本腰を入れ、国家公務員の試験に合格しました。複数の省庁を訪問するうちに治安というか、国民の安全を守る警察の仕事に魅力を感じるようになった。警察庁の人事担当者ですが、東京・霞が関の本庁勤務だけでなく、いろんな地方で現場を経験できることも警察庁を選んだ理由でした。

(聞き手 松岡達郎)

昭和57年に警察庁に入庁しました。東京・中野の警察大学校で3カ月の研修後、現場の第一線での実地研修です。わたしの場合は赴任先が兵庫県警で、生田署の生田前交番に配属されました。神戸の歓楽街をエリアに抱え、テレビの「警察24時」といったドキュメント番組の舞台にもなるマンモス交番だけに泊まり勤務では、ほとんど寝る時間がありません。警らはもちろん、けんかの仲裁や酔っぱらいの保護などに明け暮れました。続いて生田署の刑事課で刑事の見習いです。ある日、取り調べを担当することになったので

③警察庁に入庁

後藤コンプライアンス法律事務所代表
後藤 啓二さん(49)

すが、容疑者から「そんな聞き方じゃダメだよ」と指摘されたこともありまして。「あなたはこういう犯罪で逮捕されてます」「あなたがやったんですか」と、教科書通りに調べを進

めたつもりだったのですが、暴力団員だった容疑者は「は？」という感じ。「やってないよ、おれは……」。そこで会話が止まってしまいました。交代したベテラン捜査員が容疑者の敵対心



現場で学んだ、階級より努力

をほぐしながら供述を引き出し、順々と容疑を認めさせていく姿をみて、「取り調べは経験と努力が必要だ」と痛感しました。

刑事課時代には暴力団事務所の強制捜査も経験しました。現場に到着すると捜査員から「あんたが一応、警部補で階級が一番上だからトップで入れ」と一言。内心では「えっ」と思いつながら呼び鈴を押しました。「なんじゃい」と言ってきたので「警察ですけど」と返すと「用はないわい」といった具合です。ドアをたたいて「開けんか、こら」と怒鳴るとドアが開きまし

た。合状を見せても立ち入りに応じず押し合いです。事務所に押し込んだ途端に最前列にいた自分は転び、なだれ込んだ捜査員にけられてしまいました。

こうした見習い期間を通じて「警察は現場だ」と思うようになっていました。本庁復帰を命じられたときに「もう少し兵庫にいたい」と願い出たりもしました。それでも結局、警察庁官房企画課に配属されました。

法律の下で現場の市民を守る立場から一転、法律や制度を整備する側に移ったのです。現場で学んだのは、キャリアで階級が上だからといって、人は動かないこと。一生懸命に仕事をしうことを実感したものです。

(聞き手 松岡達郎)

④捜査の現場から

警察庁では法律や制度の整備を担当することが長く、道交法の改正や暴対法の制定などに携わりました。社会問題について法律をつくったり、変えることで解決に導く仕事で、20代は夢中で取り組みました。

ところが、30歳になって自分を見つめ直すようになり、警察庁という限られた範囲だけの働きあいを（外に）広げたいという気持ちが強くなりました。今後は法制度に携わる仕事を続けるうえで、法律の知識を今までの以上に身につける必要を感じ、司法試験への挑戦を決意したのです。

後藤コンプライアンス

法律事務所代表

後藤 啓二さん(49)



警察庁の官房企画課での見習い時代の後藤啓二さん

危機管理の大切さ実感

ただ、通常の仕事をしながら受験です。まとまった勉強はもっぱら週末で、資格スクールの講座を受けました。平日は通勤時間の往復2時間を有効に活用し、10分でも空き時間ができると、テキストを見返しました。もちろん、最初はいしんどかったです。継続は力なりです。習慣化することで、それ

ほど苦にならなくなりました。こうした生活は3年以上続き、司法試験の合格は4回目の受験でした。警察庁の国内留学制度を活用し、平成7年から2年間の司法修習に臨みました。弁護士の仕事に魅力を感じたのは確かですが、当時は警察を辞めることは考えもしませんでした。

警察庁に復帰後、風営法の改正や児童ポルノ、ストーカー対策などを担当して13年4月、大阪府警生活安全部長に就任しました。久しぶりの捜査現場でしたが、早々に大和都市管財の巨額詐欺事件に着手し、捜査員らの努力で、被害総額約1100億円の詐欺の全容解明につながりました。

ダスキンが無認可の添加物が混入した肉まんを販売した事件も指揮しました。この事件で感じたのは、危機管理の大切さです。食中毒を起こしたわけではありません。混入の事実を把握した時点で公表・謝罪し回収すれば、大問題にはならなかったと推察されますが、隠蔽したことで社会的な非難の的になり、大阪府警も立件することになりました。

隠蔽は論外ですが、違法行為などの発覚後の記者会見で不適切な対応で、責任逃れや開き直り、不誠実といった印象を持たれると傷口を広げてしまう恐れがあり、細心の注意を払った危機管理が求められていることを実感しました。

(聞き手 松岡達郎)

ミスタードーナツを運営する

大阪府警時代で忘れられないのが、平成13年6月に起きた大阪教育大付属池田小学校の児童殺傷事件です。第1報に接したのは府警本部での会議の最中で、「小学校に不審者が侵入した模様」と書かれたメモが飛び込んできたのです。それが「児童が刺された」「児童が死亡した」など2報、3報が相次ぎ飛び込み、悲しみと怒りで体が震えたのを覚えています。

容疑者は現場で取り押さえられました。自分は捜査を担当する刑事部ではなかったのですが、生活安全部長として、悲惨な事件を機に「子供の安全」を

⑤ 新たな挑戦

後藤コンプライアンス法律事務所代表
後藤 啓二さん(49)



警察時代の経験 民間でいかす

守らなければいけないと強く思いました。子供を犯罪から守るため、警

察庁時代から考えてきた犯罪に強い安全な町づくりを進める対策案を1週間でもとめたのが「大阪府安全なまちづくり条例」です。条例は14年4月に施行されたほか、全国30以上の都道府県でも制定されるなど法律と同じ位置づけになっています。

続いて15年1月、愛知県警警務部長に就任しました。1万人を超える組織をマネジメントするNo.2として、不祥事で6回の謝罪会見に臨みました。当然、記者に厳しく追及される場面もあります。

事実関係を正直に話し、原因と再発防止策をきちんと発表すれば、「まあそうか」と納得してもらえるのです。失敗例をみることで事実関係を隠したり、うやむやにしたケースが目立ちます。原因分析や再発防止策が不十分だったりすると、いつまでもマスキングに追及されることになり

負にできることが、最も危険です。職を辞すことを決意したのは45歳です。気力や体力が充実したうちに、新しい仕事に挑戦しようと思ったのです。警察時代の経験はコンプライアンス(法令順守)や危機管理という専門分野に生きていると実感しています。同時に犯罪被害者支援や児童買春・児童ポルノ問題、子供の安全など警察時代からのライフワークについて、民間の立場で法制度の改善を求める活動にも力を入れていきたいですね。

(聞き手 松岡達郎)

「いま、語る関西人国記」は隔週連載です。次回は7月6日です。